

吉村明の みつひかり 栽培日誌 6



吉村明
三井化学アグロ株
営業本部マーケティング部
ハイブリッドライス種子グループ
グループリーダー

1962年生まれ。1988年 北海道大学大学院農学研究所修了。同年 三井東圧化学株(現三井化学)入社、農業資材開発に従事(北海道工業所勤務)。1996年本社異動後、ハイブリッドライス事業開発を担当。2000年に事業ごと三井東圧農業株(現三井化学アグロ)に異動し、現在に至る。17年間「みつひかり」をライフワークに、全国を飛び回る。

総作付面積は約1650haに！

2014年産の「みつひかり種子」の出荷が完了しました。昨年より2県減って38県での栽培(図1)となりませんが、出荷量は1割増の約50t。播種量を3kg/10aで計算すると全国で約1650haとなりま

- ：産地品種銘柄指定県 (19県)
- ：上記以外の栽培面積10ha以上の県 (10県)
- ：上記以外の栽培面積10ha以下の県 (9県)

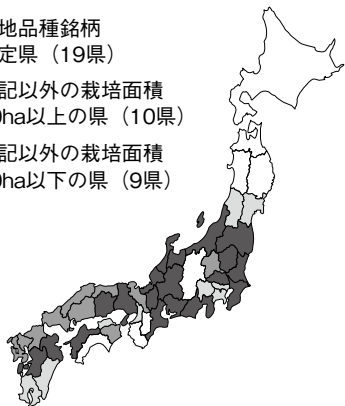


図1：2014年産「みつひかり」の普及状況
(栽培地域：38県)

つしやいですが、今年度は情報収集にも力を入れていきたいと考えています。

栽培が最も多いのは6年連続の岐阜県で、その栽培面積は約300haです。第2位は取り組みが広がってきた埼玉県、以下、茨城県、愛知県、三重県の順となりました。最も普及が早く08年産では第1位だった岡山県は第6位でした。みつひかりの栽培適地ではありませんが、栽培体系・米流通などの課題はまだ多くあります。

今年産から産地品種銘柄となった福島県では、(株)吉野家ファーム福島を中心に、13軒の新規生産者が栽培しています。また、宮城県・山形県では試験栽培が継続されます。これまで難しいと思われていた東北地方でのチャレンジ、果たしてどのような結果になるでしょうか？期待と不安が交錯しています。

栽培面積の拡大へ 「みつひかり物語」⑥

「みつひかり」に限らず、民間品種の普及は各企業とも大変苦戦し、撤退、事業譲渡あるいは小規模な取り組みを継続しているに過ぎない状況です。そんななか、みつひかりの栽培がじわじわと増えてきた最大の理由は、「生産者と実需者との顔が見える関係を構築する」ことができたからだと考えています。

プロジェクト開始から4年目、一向に拡大を見せない従来型の普及から大規模生産者に直接働きかける対話型の普及に方針転換しました。愛知県の2軒の生産者に栽培をお願いしたところ、2時間の話し合いで、それまでの3年間で積み上げてきた800tの半量に当たる約400t分の栽培が決まりました。生産者に取り組みを紹介し、自らの責任と判断で栽培していただくことがこの品種の普及には大切なことだと感じた瞬間でした。

同年、農業ファイナンス事業を通じて大規模生産者との接点を持つ日立キャピタル株が、中部地区の生産者を対象に農業セミナーを開催しました。需要のあるお米として、みつひかりの栽培を紹介すると、このセ

ミナーをきっかけに多くの大規模生産者に栽培していただけるようになりました。また、生産者同士の横の繋がりで栽培が拡大していく仕組みができていきました。

栽培技術も多くの生産者による栽培実績を元に解析し、大幅に改善しました。「生育期間が長いので遅くまで用水がこない」と栽培できない」という認識から「花が咲き終わるまで水があれば十分」というように大きく変わり、関東・三重などの早場米地域にも広がりをみせることとなりました。

三重県では用水が盆過ぎ(8月20日頃)には止まってしまふ地域があります。09年は8月以降、10月の刈り取りまで全く雨が降らず、品質低下が心配でした。(株)神明の製品受入検査において、胴割粒が増えることなく、こんな過酷な条件でも品質に与える影響は少ないことが確認できました。



栽培のポイント⑥

速効性肥料を窒素で8kg/10a程度施用した田んぼに、栽植密度坪60株で植え付けた苗をできる限り浅水管理した場合、地域・気象条件によって違いはありますが、4月下旬移植では6月20日頃、5月中旬移植で

中干し後の入水は幼穂形成を確認してから

生産者インタビュー

「みつひかりは品質低下がないのが嬉しい」

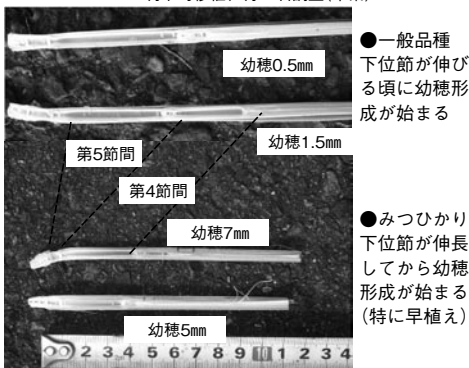


嘉数末弘さん(写真左)
豪さん(写真右)

みつひかり栽培3年目の岡山県S市の嘉数さん親子は1t獲りを目指して、移植(稚苗・みのる式成苗)、乾田直播(条播・点播・一粒点播)のさまざまな角度から栽培方法を探究している。岡山県では肥料卸を通じて早くから普及が始まっており、12~3年前からみつひかりは知っていた、とのこと。父の末弘さんは「当時から周囲の生産者がみつひかりを栽培しているのを眺めてました。というも米評価が低く、一般米よりはるかに安い値段でしか流通しなかったんです。最近是一般B銘柄とほぼ同等で取引されるようになったので、沢山獲れれば増収につながるかと作り始めました。みつひかりは刈取りが遅くとも品質低下がないのが嬉しいですね。導入すれば面積拡大で心配することはありません」という。今年は18haのうち、7.4haがみつひかりに。息子の豪(いさむ)さんは、「今のところ移植が一番安定している。種子単価が高いのでコストを下げようといういろいろと検討していますが、生産コストを考えると大したことはないです。収量増で十分にカバーできます」と話す。まだ手探り状態だが、今年も嘉数さん親子のチャレンジが続く。

●第5節間以下が伸長する

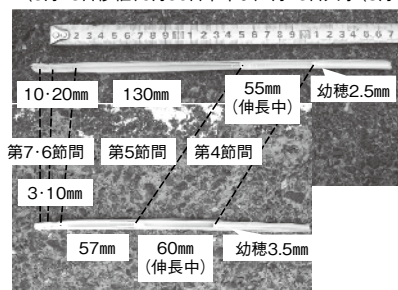
▼みつひかり 4月下旬移植、7月21日調査(千葉)



▲ヒノヒカリ 5月下旬移植、7月28日調査(徳島)

●早過ぎる中干し後の入水は下位節を伸ばす → 倒伏のリスクが高まる

▼入水が早い事例＝中干し2週間
(5月15日移植、6月30日中干し、7月15日入水(8月2日調査))



▲入水が遅い事例＝中干し5週間
(4月28日移植、6月15日中干し、7月20日入水(7月22日調査))

※いずれもみつひかりの関東の事例

図2: 「みつひかり」栽培のポイント
(節間伸長と水管理)

協力:
三井化学アグロ株式会社 営業本部 マーケティング部
ハイブリッドライス種子グループ
〒105-7117 東京都港区東新橋1-5-2
汐留シティセンター
TEL: 03-3573-9869 FAX: 03-3573-9891

は7月5日頃、6月上旬移植では7月20日頃、6月下旬移植では8月5日頃には分げつが旺盛となっているはずですが、この時期から中干しを開始します。

その後は「幼穂形成期に入るまで入水を我慢できるか」がポイントです。特に移植が早い場合は中干し期間が約1カ月と長くなります。

みつひかりは一般品種では伸びない6節以下が

伸びる傾向にあります(図2)。中干し後の入水が早いと下位節を伸ばすだけで倒伏の危険が高まります。やや遅めの中干し開始で、中干し後の入水は幼穂形成を確認してから行なってください。

安定した多収栽培には、幼穂形成期からの入水・穂肥が不可欠です。入水の頃にはすでに6節以下の下位節が固まっていますので、籾数が一番増える幼穂1mmで穂肥を入れても一般品種のように倒伏しやすくなることはありません。みつひかりは出穂がバラつく稲でもあり、同一株内でも茎によって幼穂形成に幅があり

ます。主穂は大きいので分げつの穂を大きくするため、主穂の幼穂が2~5mmの時に穂肥として窒素分で2~3kg/10a程度の一回施用を基本としています。より多収を狙う場合、穂数は少なくても収量を減らしたくない場合は主穂の幼穂が1mmの時に1回目、その7~10日後に2回目の穂肥を施用して一穂粒数を増やす、という方法もあります。

コシヒカリと同時期に移植すると、出穂は2週間ほど遅くなります。みつひかりの出穂時期の目安としてください。みつひかりはF1品種で特殊な採種方法をしており、純度が100%ではありません。稀に一般品種と同じ時期に出穂する個体がありますが、それに惑わされずに施肥と水管理をお願いします。